

新編海防文集

下

中村俊定文庫

文庫 18

810

2





新編俳諧文集下

燕庵蟹守著

端つくり

月居

獨酌とつらと疎疎に客あり枕とおくくかて
 いとく梅見とんと寝ておのふ平今夢のうらみ
 淡粧も佳人とらうかき夢居くおあそくく
 乃わらそわのほもあれ歌きあの羅浮山平枕人
 とて懐ひおあくはさあくまらう縁のささのかと
 花のまゝすゑとら入るめわくの挿ふれや
 咲ふらう夢梅は木のるもくえのそ



炭説

椿堂

紫省孤室の時錦帳の下多其庵を誰か尋ん
まじつこのまゝ又逢坂の関ハ越せん續松乃
もえさうもてても高き即妙なるもの云は
あり啞とあると據りよ即衣をさげて離と報
られみふ其用と遠に黙炭ハ孝の如形よ
多木のうし炭のをねとよまは法師の體
月も悪しきもさう

瓢藏銘

雪雄

いよめる時も遠さくも心ゆく魚舟事
おつて実のまゝ及故乃端平何れと書つ
そ我意のあり焼の下ふ引らして
寐も起もさほハ俳諧のありもの
洒掃の事僕知るゆめ不足を
たみかけを遇一ひらをも
うしあふはめく思ふと
るふ心ひて斯ハ瓢藏
つゝ是ハ納めを臺僕ハ煩
ふえて一ををひつ
女は大方と世ハ易く
腎軽うして覆

下

=

やま〜嬉む魚〜若是跋得〜八目鼻
を書て乞兒手與へむ

三原茶隠書画帖序

篤老

昔わ休大納言の年うせむい前わ大納言とよそれ
を鑑ひ〜後京所片や〜むる 往還端平
仮家をたて茶を接待せ〜めあひてさほ〜の
浮世えあ〜を穿せ鑑ひあ〜の海うの水あを
さみ〜せせ鑑ひ〜何や〜乃茶紙手
え〜やめらおほえ〜れ〜何〜り〜茶紙物候

とも表題と〜失念〜それ大納言の仮家名と
籠身乃ぬけわ〜あれともの〜あ〜も引〜け
ま〜三原茶隠此一卷と〜〜〜わ〜より大納言
わ〜隠居と〜あ〜仮家も〜と〜茶一と〜も
接待ハ〜せ〜れ〜あ〜人〜侍人前人画か〜物書程
師能借師と撰を以〜その茶の一巻つ〜と〜あ〜して
隠居の後茶葉の〜物と〜んと守わ〜れ〜ら〜あ〜れ
町人む〜〜せ今と月ふ〜つゆんのお慶〜ら〜
風流の志と〜と〜〜似〜うた候と〜おほ〜か〜て
篤老小巻紙を乞勿論辭退せぬをわ〜〜あ〜て
以〜文政三年卯月篤老園の小庵の茶紙

花の姿を草子とてさすて〜るに

犬坊主傳

卓池

犬坊主とつりまの入りつりまは氏何某の男と云
るを志し其被の竹林の徒あらわ〜のや復ら
菅河のあみ定をひじある佛徳山のあみ定の
案年大を抱く即以人呼て犬坊主とつりま
形かふ人の哀う〜形〜夜あ〜をせ侍と
わ〜るわ〜るそわ物とる以食物〜も後〜け
ま〜るあ〜よ〜とてあ〜も〜る市中小あ〜ら

小語〜新巻を捲ひ月乃夕〜の聲に嘯と花乃
わ〜る山おねひ飄〜と〜あるはわ〜るある自
言場の様のみやあ人よか〜と〜同じむとむれ
ともさ〜るあ〜るをさよ〜るの〜志〜るに
あ〜るあ〜人月あ〜對〜無常迅速のた〜る
あ〜きを思ひとあ〜やあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る
む〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る
や〜て都卒の雲の上〜生れあ〜るあ〜るあ〜る
あ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る
あ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る
あ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る

芙蓉扇賦

瀨古

予う別荘を竹樓と号して常小雀を籠に
其雀の心〜〜門扉の覺小雀も富士の目小
〜見えてゆくおのの景及聲も小おあ〜
琵琶湖の八景もをさ〜省る海〜とて
主人の控室のふみやと晴小は〜めて〜つと
ゆりやうて被交ふ初て見るに幾年もぬりし
〜ふあぢれハせんまもあ〜思ひよるあ〜枯
芦を束て床を拂り聲紙〜ぬちて窓とあ〜
須磨の伏屋の古庇の板小芙蓉扇をかひ付て

見れば能くみとよきあ〜し霞とを赤き
は半伏小籠る何ハ松柏の聲〜風〜とて更
人語の響をきら〜破小菊小連と樹の聲と
弓の矢のこ〜り余情思ふよりのもあ〜は彼の
破戸を叩〜けハ滄海渺〜と〜て礼山〜ち
つ〜ありてをきあ〜と遠きあ〜肩あ〜れハ抱る
あ〜と〜う〜ふ〜何〜ぬ山のさ〜巖わ〜れて
お〜乃窓〜ぬ〜う〜か〜と沖のあ〜ら〜あ〜白
ぬの影を〜〜て〜と〜は〜人〜不〜影の〜
う〜を〜あ〜〜む名小負〜山深名の橋の流
と虎関のあ〜り〜あ〜れ出猪の鼻のき〜は〜尾

空を風のあやあはれ舟似てまゝのみの控帆ハ小
隙のたそはれ舟ひびく波さあや出で釣を系
管小舟と舵籠杭橋の多不浮み旅人のしりかふ
多瀬小今切の夜帆を見送り宇布見山崎の
回里小りーは禁けあまれ風をひきあふぬ
かたに靡く風情ありてあそれあり伊佐地さ
まはの入江くくむくまの松の汐年疲て
屋曲あつらう画さうあー村檣村の測碇ハ
細江女々浦小横きとと何訓ー管巻小ぢぢ
く管あはれさほもひをうー早斐の白根ら
修瀧路の山くをあまて画あり 琴檣小

あはる厚金の伊奈依流の琴架小通い時を
ひびく村鳥ハ浪名の橋付をうー一浪板
かやう入日影も月あううー浪あむまぬま
舟焚管うまふうりの已さほくあまたも只
この窓をもてあはれやうあふんて其気色現然
とーと英人の容顔粧ふ如く百景百景と
るあられハ横あまの各中をたのしむ夜ふ
見は真小菴り居て誓ふあふせきと道き
管とあは教へあをせて誓の崩さうあまむ
管あまーとあまあのみ

送友人西遊序

蟹守

富士ふらふて三月七日八日と箱根誠を流蟻客の
うろをへあふく友人何事と駿河路や宇津乃
山とえく伊勢の市神女詣と大和めくり
そとて如立を岳のよみくくと見送りぬ
そもく能因法師を記ろそね極平白川の
譽と跡く彼上人ハ福ふ赤ふ杖曳て
ふそ見法海如名を傳ふ今子と御詣り
たふれ世を瓢箪のころくおれせ行く奇
境疎迹を採んぞ思ひやめて羨く所謂

少文の山水の癖司馬氏ハ杜遊めもをさく
あふくしとそむや大井川の安きく
あふくし人の脊不負れを執るこそ茶川
あふくしをく孝れ鞠子の宿好とそくけり
せふあふくし流名おもくし翁の奇骨もあ
つう沈吟せられ折ふられと流教あふく
べしこれハ茅野の志とより那の花紙園豆
腐ハ豆腐能味ひよく極久かんと来よせ
かんと海よりせとく山

其夕女句帖序

玄蛙

あゝ文も又只とよみ〜も只と古め〜とて
久方れあ偏の擡立おつ〜り多る啼 吾妻の果
まてもふみや習人と思ふらも先ハ書きたり出
雲水神垣へ中勢きある其夕々女ら〜のふと能
あるも只と甲斐〜しこれハ家正風の道を踏
習人と思ふらも娘を憂〜のと思ふら〜に
風流の菊と心ゆへ〜総籠るらも海へふ来
あ〜と思ふ〜と又けさの洒落とらゆへし
夫乃以〜ハ玄神た〜と思ふ〜を御階の

前句と〜らえ〜し数句と無理平 作〜人と思ふら
〜の可ふられたの自然不任〜し已ぬ上〜と
思ふ〜と又〜も思ふ〜と〜 たる
世道の先達も逢ひて松と菊より 籠るる〜けも
あ〜い又馬ふ吟も〜様のもも同じて晝
飯ごろもの二見浮き紫水玉の敷〜を乞ひ寝て
浪あはるるら〜し〜と〜 たる〜ら
それ古池の水底をぬらもの 甲斐ある〜とあれ
端々〜の〜と〜と〜と〜と〜と〜と
書〜と〜と〜と

痺辞

桐拙

妹の面おもはるはあても寂きものよや鼓動出
おそやまれえとふた虫の遠出より 蟬の
あつとと寂あやこいとも 暮もさるいらの
あつとと静よのかや同じもいこもさるいらよ
くくと静あつととをうくくかかれと子鼠を
踊るものあつと人

豆太鼓頌

寥松

妻れ日影のうらうらと 卷ふ袖の海苔見の

もてめさふをうけあるものを忍ばぬかうら
曲雲とらうはものあ似て 桐を裏とあく表と
たうくは帯をさると 墨小花形をおして飾とす
豆ふ練つあきるを綴ふつけ振うとせと撃て
聲をあき事 僅ふ春分発生の音と 象もや
いとともさぬういと竹の淫靡あるみさうく
のわやもあさる是のう人の所習 鞞鼓のたう
あさくられと兼ふあるさはいまうくくやまもぬ
能修をうつとけはつと李めく誠ふをさるえと
慰るれうはるものこをえ田めま 鳴くを
九序の習もいこを師曠、耳をかるみも

わらひ只二島多末を舞まら拍子よく合を
島の千歳り扇するよりもつとおひらうしたく
をむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
あんま下千あひらうり幸哉志うらわれを煎たるふ
さへ花さくまのさくさくさくさく是も亦採てはちれ
わこもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
りて廢るこもさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
盡る日あはさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

息杖辨

豪山

元天地の写み留して功あまうものいそま息杖
中あも楳杖を四枚六枚肩伴違者板小榮耀ハ
名はまきとも呼まは醫の雇まことありてハ非命のこ
と危あまわらうと檀門の横糸あは浮雲の扇を思
ひむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
とも多うハ片岨藪垣より搦出さま不幸も雪介ハ
後さくさくさく其つともや且みとあ霜を拂ふて所不也
穿ち夕あを亭丈を赤てさくさくさくさくさくさくさくさく
又習わす赤錢小元の道み戻り志のわさくさくさくさく
+

あざれてゑと悲し其手へ渡す法もさあれさん末あつ
雲の跡を越し一登城測影の川をこころりて辛苦
いそんうとふしとれと殿をた立城酒の帯もあつ
くま炎夏の喰控爪も核不汚るくその字唯
終日持くまお言罷りふ出女の立ひき投賽能務
負勝ハか—あつとむもあつんや果ハ川合喧
喉のけ—とあく稲妻の働—て大業物のつとわ—
吾とも先汝よりかあつり控らる併え来因うらろ平
無心あつられ其流り不かつくも是等用の用あれハ
まろ—吾こゝむ世波の行路難を系搦の重なり
たよむ殊不足不悩わり—と往来三百余里う留汝不

二百万歩の勞をうくされハ日毎平扛夫の難法ハ笑ハ
益好—といとも汝ハ勅靜とあつみ控かこくんん
徳をたて感さるうわ留り愛不辨を促ていさう汝
小礪ハ彼柱杖子乃一則平無門和尚言をとりて
投過斷橋水伴帰無月村とありしハ汝ハ有學不
し—是小娘入せえ貧屬榮枯ハ一握不何りや
知り只其自然不控らんやとあつと法へ—

紀行

鳳郎

初春の心や清くうたるめてと死をふうかき秋の
苦所寂莫多はあつれみ泣とあへてお人のまゝん

あてさ家々風月の境界より凡庸の人干渉の沙
汰かゝわれハ昔今姑是非を以少へきにもわら
とやうれつとせおほ米幸かうむを家國小真
の邑くくをめぐりしをさうくわる依を干
入る一畝のやうとをくめくくお阿くくとおほ
しき年のわく六十強く四五くくは應ききや
おほ田路どのこ本孫捨の糊こそ多あるに後取の
ぬさたちの支指をわをせたりん知くある田舎
めさしを急何られとまわくくくまをさして調度不
んと屋もさばあり其質朴たるは古風のおこころある
るいあくくくある長の果ふもややんいぬりあくく

志のせらあるものおもひやくれて干鱗エビの日南くくくも若
英つとせく山海の珍味ぬこくあぬ思ひをあくく
くくくくくく三年味噌の志何かききたやうく
めく喰い仕舞はひ濁酒をくくまきくくめくく
あていりあも古代めける大なる盛をとくく
かのをれくくくくく作法をくくくもの志の
う年とくくくくくはひと真わらあやうくおほえり

毛蓼説

路宅

青帝一程をりくく予り庭不生せくくむるものあり
不謂毛蓼あり識者曰是一名馬蓼ありや又

或人多藝ハ大藝の名ありて毛藝ハハブテコブラとも
 以ふと何きを是とて何れを非とせんや予ハそれ
 褒貶みかゝるゝは是非中の一塊み白根をおろ
 して自一種の馬藝とある又是ありんや非ありん
 やさ家み今年あるまの人を六月を以て用とせし名
 家み多藝博士ハ八月をもて是み用也亦くゝり
 是を是とて以て非とせむや拙をもて亦ふ
 へきふわゝは非是を方正の流ありと嘆いひよく
 是非の間小遊ひて再ひて骨の大空ふむうひ流
 光小肺肝を曝しする藝の種を討て是非是非
 をいふは独馬藝なりわゝさ法をもりて馬藝なり

めくさ家ふたふ

名月辭

圭雨

人こゝろはささうきさや上弦と月の名のつら
 り名ありておろそ骨のこゝ中を月の名のわん
 かきりる曠野沙村或ハ溪林海濱こゝかゝる
 うろ遊ひ一歌くおもひくは毎を能く
 たも見えたりき月のおくおほくの中なり
 急喉やうみ者ふみちの山の日あり強き出る
 こゝろふりおれ思ひせられてたふあくち
 うゝ骨を人々とともに文會てあるも

名月の辞といふを題して梅の枝のれいりもの
あまこもろくめれたんかきうあき月影思ひを
み〜うき草ふかきとむら桂をわらひの笑ひを
う〜く鈴田娘のとうえおそろしとてやみぬ

二十歌仙序

来記

人美き河を市申花藤花地ふまきむちとを思ひ
老とを函林勝地りからまんりを祢かふら
道の学ひふんをう〜し若鳥の情をあふまん
うきあま〜し奇測み〜しいよ〜た〜き

よそひとみあをわ〜それともを〜よりああ
んを感して市申花交をさけ二とせま〜り先
難波津乃あたまあんはめは里の東よ萱あ〜る
ものをつ〜りて大悪産とよひそ〜母孫や〜むと
そ〜〜あ〜いよさ人の覚悟あり夢にあら〜と
あちを常々老のあふを歎〜孫の及の〜と
よか〜ん〜の〜縁〜あ〜門人誰かれ〜
ま〜〜〜う言齡を誇ひ曩小益合といふ一集
あれま〜いひの二十余仙と其弟二編あ〜き
色の朋友門人う兩吟をわ〜〜と題号ハ
延寶の例あ〜ふた〜あ〜り多分自よ

十

十四

と書かざるをかゝりみればよりと健なるを以て
其健なるといふをばいさへ巻あきりれ連句の
速なるあてもあまふく赤きさりけり文のかま
ひあて個ひいもあれと後縁の二圓の巖をみ
波濤をこえそありしふわらわたり更ま〜覚悟の
とゆり小縁おまかりせそ形文こそさしあめさふ
雅かぬるを〜しのさしあきみおま〜さしあき
あ〜さしあき〜さしあき〜さしあき〜さしあき
即〜山ともおもふ〜さしあき

書画帖跋

魯隱

文かく〜ゆふ〜を記すの〜かきあか〜と〜ゆふ〜
を写すの〜うも五水十石等おた〜ひ〜さす石ふ
も入〜や一句一連乃らちま〜みも又び〜を
あひ〜か〜〜春秋のゆ〜あ〜のめをれと
山の海あり流のこまやうある迄の書きれまの
を〜さ〜いを見〜〜ゆ〜〜ゆ〜ゆの
つ〜ふもま〜き〜ふ事〜み〜をね〜て心の神
の歌をと〜む〜お風韻のた〜さ〜い〜さ〜ゆ〜ちあ
を見〜多や〜と其人か〜を〜い〜〜さ〜ゆ〜ら家

魚ししを流ほりて等如物を記してさし免やと
有べきとてほちをら免やとわす人哉

俳諧古今説

井里

夫能澄を和家の流ありて其免連系あり人皇
十二代景行天皇の御宇日本武尊東夷征代志
のひ甲斐の酒折ありて新治筑波を由て以て秋
寐つると縁起へるに記しあり新羅のあへて秋
あをさし秋秋日あを十日をくみさくまひる
是連系乃盤觴るるやそれとてと縁起ありてあ

の文字も定まらぬ美系小依保川の糸をせき
入ま極し田をく尼のよめ流小菊る子稻飯ハ
獨あり免と家持の下の句縁多ふと上下今
是そ連系の始ありき又貫之の三十一みまの一
首を上句と下の句とさうらひまきみまふを後
村上天皇御製上の句小滋野田傳下の句をつけ
らまたりあまの平の清登公下句句小登蓮法師
上の句を縁し歌ひあまのあまわけさかきんじ
かこてあまをりこまをさしと和とあまの
さうらひ謂程連系こそ今の能澄ありて松
永貞徳さしめて宗通を由るされ終ふと家

下

共

あつたまはくきまはつちを結るものにあつたぬき
くまの年あつて松尾椀青の山村季吟の門下
入て自西風をあらし中真一流の能くあつたれ
まひ二子余人の門系ありて夷洛即ちふたつとむ
まの庵年一株の芭蕉あるを号して人あつたつ
芭蕉の翁と号するふありぬまよりさほく愛
化まといともさつちあつたは翁の流を志して能
借るこそめさつたれあつた能借といふふたつとむ
べー花月風流と風雅の解ありをうしとむ
能借の名ありて流きと風雅乃実ありは
三つの物なり及つたれ世俗のたむさふとむと支

考ふひつちもむへるうあ能借をふより出さふ
ものとの思ひたむをつらひ枕を築あつちとむ
まのいをのしみあつて能借の名あつたつち
酒利の赤味噌より出さふものありあつたと酒利の
汁なりみそをうへさふちあつたれともあつち
古云をつらさふものとりあつたあつち時ふより
おちあつてつらさふちあつたあつち焼味噌
用さふ似つちとあつちあつち又らさふあつちもつち
流しとあつちあつち得たつち句ふ十圍子も小
粒みふちあつちの風こつちをうむか味ひて俗中
の俗ををあつちあつちみ流さつちやうとつちとつち

新〜〜心出るるを此道の幸と云ふかあふ
ある〜〜能滞ふ古今時代の異なりあり
此の事ちあをよ〜并て彼造化ふ〜うひ変化
こそあり〜けさ〜う〜ありあされや ありひ
あるよありせみ〜〜うき等〜〜かひ付る根を
あさふあん

雑文

泥中

む〜〜糸姑も〜を摺を鬼の行とて敵も〜
世定を空ふあ〜て却とあ〜れ又行つあ〜る

学履の履を踏れ〜〜を押し〜〜を身を
わやほ〜〜をあれと孫母そ姑鬼又〜しとそ
よ〜やん〜りとも何の益うあ〜ん今の能滞
を〜よ人等かれも〜れもおられ〜りや罵あ〜る
かの奇怪を好〜もの孫彦や〜か〜
〜〜りあ〜る

秋月序詞

鶯笠

門守姑翁出〜事姑ち〜子をとり行ふ海るに
その事〜〜と〜う〜つされと火嵐の皮ハむはし

十

六

ぬぐくもあゝれ多流うあゝあまひのくま
もあゝきつれくおありのゆゑを何と
あゝ秋小老るあゝあゝれもあゝあゝも
あゝぬ命よりあゝれ家を何ふるあゝ身乃
あゝくあゝあゝ人のあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

紀行

蟹守

文月のそめやそ耳響る風も春つれきくま
りりあゝ暑き目不旅とも見えそ登原志こして
あはた〜〜杖曳つり咽るの磯を渡り宿
を宿ふえあ〜〜てけ不程あゝ暑きあの渡ふ宿

敦盛の御墓おとほるとありて神の御掃ひ
わく福えあると次ぐのしむらひとありて
よりふ三の谷二の谷とらやわかくせしはふとや
夕日の名跡遠山千かゝりて暮るにやと
空めんとし何うし書斎寺をぬるとも此舟
舟よりりて其宮の今案しある人の昔に
むあしき床とせりいさしとせんまゝし
片しそふもあまの御供ふと習ふ宿を新し
まつゝんとありてつゝに火とありの傍見と見え
橋入る何玉の人そお籠りありと先やう定て
あうてあゝせりいさしとありつゝとありとあり

おとけし家良しとせよやうけ門前み小
家わを是ふ志うしと頼みあゝわししの傍に
わあひたりといふし子細あゝまし子あふか
里ぬとゝしと教へあゝを力あて杖実あし
ゆくあゝた灯の影あゝうりて島の中ふあや
しゝもたそ跡しきと妻戸よりさゝ観さ
あつゝにわあひさうあゝ福と年終祝むをち
さうりお親父あゝられたる様あてゆらふ新行
燈のもとも顔さしあかの火とあり新教し
よりもつあゝたひ入れられハ打懸路さゝさ
あゝんさゝ目も顔の人の見えられしと今日

の亡者の妻ふりしる病のうらみさうりとしてあ
ふむわらふし小其まらう人あも嵩まらうせし
そらうしきひおののものも儲わりえ昔し
おあさへとりみ嫉しと涙あし妻も子も山
上りて言さうりしけ淋しきふあとりみ愛ひ
ほのうあり電子新さしえ何れとわらうし
顔つこまあしし種あくはあきし湯あき
き山風吹たきれ吹あしして涼しきり
まうりあくとやせらるる地そきし縁何せ
月もまら浦あしわらうしめうして秋食も
きうしをやうて改をとり床のへて先の秋しを縁

さうしふらうしはは先ゆらし寝入と下は母床
とつてさうり縁ぬあられも遠入と例うし
せしう坂の寝たうはいきしん驚きとあし
是とあしとさうりあしとあしとあしとあしと
さうしとあしとあしとあしとあしとあしと
とつてさうもあしとあしとあしとあしとあしと
あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと
思ひあしとあしとあしとあしとあしとあしと
せは破浪まきと立ちとあしとあしとあしとあしと
美しとあしとあしとあしとあしとあしとあしと
狗あしとあしとあしとあしとあしとあしとあしと

秋のこころ次廣の表をおぼえりり
山くまわれと寝えりり
とわらふ湖物のささる月のさくらかきしめ時
きまひりりりり

夕顔頌

少翁

そも梅をまき手先あちて雪おちらも
咲出けより花の見たるりふさくし
手それとりふ茶あくる且めこそ唇を
寝ふ夕鳥獨りふを待て咲出るさ
ひとめ

あしぬえせものあしんうしつし其わりの
見多に依るの書炭垣あしり蔓の浪
とせ家さるうまやさし
よまひしし竹時あや又夕鳥の上の
かばりし夢あしとわらもぬし
されしそと雪上の沙汰あし
花街柳陌ふ出る推行女兒ふ
実を踏いてる形ふ来あしてふ
菽菜師のさき森のさみぬりけし
天の吉葛と唱て水を汲み火を
煮ありしとや家を許田た
たぬ瓢の名を

ト

廿四

殊で〜ハらと門遠ま〜し〜とれと人の多々相
し〜竿ふかされと香具山ぬ干きんあ妙の家と
んを風ぬあられてと天津をとあ所領中振うとわや
し〜れ是を鼎たべふ熟すき〜味ひ甘く能く人の脾胃
胃をと〜殊ふ其叩あひありとらひ〜し〜とれハ
急の艶ま〜と実乃ふ来あるも取於得矣の事ら
め口のちか〜と〜

蟬説

一飛

豫ふ殺種わり其か〜と〜し〜ちひさ〜と〜世あは

色ある四五月頃鳴わり忌後のころ色ぬ〜と〜身ハ
ち〜み〜と〜てせし冠乃ぬ〜九十月ふ〜り夢凄急小〜を
か〜く鳴もあは色の青きわり落赤さあは〜と〜
六七月最さ〜むあり又一種二月中ふ鳴あは〜と〜
いふ馬咽より多快等〜りあるより十七八種其
類ひ名収挙てか〜〜と〜し〜日〜し〜つ〜
法師能名を夢の〜し〜ち〜ちや〜をわけて凡を
いふの〜あり内ふ又一つのおもれあるものあり啞
蝶といふ小兒ま〜取て是ハ啞おありとを〜し〜も
い〜して控〜と〜と〜し〜れ岩ぬ松松の木の写れ
逍遥〜壽を春秋と志〜し〜てあは短とせし

下 莖

身ハ寸余小玉をまきしと大を羨む自然の玉樂を智
ものあり業を以てあり米穀を盗み喰ふはさう
ひあく安然として風を吸ひ露を飲め梢のさふ
飛ひて身を清潔すしとかの世は塵小まひま
目先の利のこふかすい蟪蛄も志くさふ人を
笑ふ小似くされはこそ陸雲も不徳をわけられ
を賦し系紫ぬらうのくさ心を詠れ者あ人の年
たけ耳くくありて鳴りおとさるるを操りか
侍るる唐衣つきくか沈氏玉のうて
あみ美人の髪をまふとく詠し日蓮上人の
御書小わけ跡ふといふある因縁そともかれり

生を齊王のさし死王を怒り死して化米家もの
ありやされ怨る人の真犯のうれかた記を上人
やうて跡後志まふ人さうい増とぬけか
ふといふ彼乃鬼情いさこれさるもあう歌を
と色も喜もさうくしき虫をを巻るものあり

朝起論

真貫

朝カン起タン論乃ハつツくカ糸ハ一ハ紫ハあハてハ糸ハ
あハらハひハつハくハ目ハもハ糸ハやハうハんハくハ糸ハ
殺多の糸もさうくしき虫をを巻るものあり

ト

共

あゝ廣くうまはし〜けさひわや〜らも希見
うめも又もろく〜ぬる物やとあるんふき草花の
ことともさへえさりき実蓮らんりらぬし
も風目さめ〜起ゆる〜り〜あや〜
こちきふ〜子使例不在て曰汝者〜子釣藤
を好きたま〜釣起〜て家ふ来り〜得
た〜顔あ〜る世もひひ習〜る釣藤釣起
の諸餘あ〜る子奪〜るあ〜んおほよそ釣藤
ハ人〜るの物〜にや〜釣藤とさ〜つれと
いきたあ〜〜と釣おまもわ〜るかの人昼寝
して涼責せられ〜起ひふ異ふりと〜もい〜

ハ急乃罪のうれか〜か〜んはほの〜きん起とむ家の〜
を愛〜せと赤と〜わま〜り風起朝せん〜し〜も
假寐〜て既小賊害をすぬられたる趙正卿ありさる
をふもを以釣起〜と一は〜る〜るを後小ひひ
胡楸の丸呑あ〜めとも〜天地と起〜〜茶物も
あ〜つ〜釣開〜と今や〜寐〜もの〜を〜
わ〜れ〜そ自然の妙用あ〜て不謂老子子孫を
さ〜れ〜い〜る〜これと世もた〜る釣開を
〜も〜能目さめ能冥〜性あり〜〜聊も
勸め〜かも急あ〜る〜る〜てあ〜や
以〜ん人見みあ〜い〜安ふ〜〜斤鷄大鵬の〜けも

あつありし露あふおひて恍惚とて遂に物寐
の意もあつらふ風起むとせも何事うねるも
わつらふ事をあつらふのこゝろあつらひて天の物寐と
等しうつらふ何事うねるも有吾の啓言とて
心と更ち笑みと黙然と見えうつら蓮葉の匂ひ
言あつらふ宇治の網代あつらひてや新方あつらひ
ありふ事あつらひて世あつらひて周縁あつらひ
と目とてあつらひてつれと例の師カキあつらひて
忽忘をたそらぬのこゝろ

次上國見平記

真洞

今年孫生如末吹よれ此神ねまきんとて例の友
とらえしあつらひてつれと例の師あつらひて
朝朗心の節の多総引弛め是あつらひてあつらひ
攀よれはあつらひ人えとて松とて更ふ山あつらひ
小屈曲あつらひ松とてあつらひてあつらひけ
崇よきまは匂ひとて彼の三百七十宗首の哥如僧
もきとて思ひ深へられ當あつらひてあつらひ
受得うねありえとてこれと遠小酒おのあつらひ
八重あつらひあつらひ山崎屋の板子棚引カ

ト

共

葉の吹拂をかくさ塩の山の夜己小利益の流せ
たれ目つ川の飛ぬ流と踏てありてハ白雲を平か
くれ寂寞とくく産生濟度の海ふありきく不
和川以てその譯をあらめあしと題目そのむう
しを疎ししきれ川山の昔ふあを荒川の
名みよもれ芦川のあしとの程きも深小くく
橋跡よかられを誌ほのかしききをのうれ笛吹
峯きんくみ流めをわしと一斥あのことあか
あしとあをせ富士川の名ふあうれてを黒沢
山をめぐりて舟客のくくく影をかきく一市
川の里ハ卯花紙干あしと多時香移風情

あり都て山平流ひ流と帯きくをく雪在わうは
雲のたきまひい峰あうくま書の脊中うくくえあうは
慮悉美景をうくも自然あうあめしとあうく
感動せらば於吹上の山山え上まてあ人あうぬ
太山亦の繁くあしとあひと先達の笠をかき
乃とぬおあしと巖時あしと叫く人を叫が
水乞き志をくしと峰く石を跌あうしと人の
志をへみ付を密み汗しとをいよれハ谷丸の吹く
吹よるそ実吹よとああきくし

送鷹園主東遊序

靜管

一堂のうちにありて、らんを乾坤の外に遊も
志むるものも風人のとよに志を交ありとれハ
古人も幻術の才つとて、いれしうかの一堂の
茶を煮る翁年、むとつらまて無人の境に
かゝるめをえり、終に竹馬を乗て郷里に帰る
わらわの旅店に遇る方士の杖をかり、刹那に
生涯の榮花をさらめ、もつれハ榮飯のみえ
さふおとろく、かゝる家ありひめをわくは只一句ハ
魂の入る、いとし、飛うぬを、いハ作、此魂を

おもふ、たとい招魂の法を傳ふるも凡夫のたえ
やまゝ入つへき、母のい、志さう、小機ひ、おんせ
それハ崑山の玉光り、まじ、恍惚と、ままの
術を、あふ夫百急や、採り、蜜と、あは、畏の
其辛苦あり、も自然の妙術あり、い、や、此その
修して、岳玄の圃小耕さんと、ま、ま、の、ま、その、実
比、い、い、て、ま、れ、あ、る、景、情、を、求、ま、ら、ぶ、は
何、そ、い、ん、を、悠、き、り、持、ち、む、の、あ、い、ん
鷹園のま、ま、不、記、る、ま、り、わ、り、て、あ、め、を、洛、宛、の
其、久、し、く、年、又、甲、形、の、黒、弱、不、鞭、を、加、へ、て
古翁の細乃の、わ、を、た、り、奥羽の勝槩を自得

せんりをおぼさる嗟乎あは擧げおけるむじ
今尔感し〜と〜と景と寓せと精神日下
百倍〜と有夢の画乃如と〜とわさきを写し得
てん宣よろこぶ〜と人や予も形影ひあ〜と
わ〜と今そ伏櫪の歎不流〜と居るふある
るりあ〜と後せめて〜と錢祖の吟も〜とあ〜と
ある〜と一居あり〜と名區を想像されと革を
履た〜と虱を捨るよりも〜とあけま〜とさ〜と
後よ君と都三島の間に翔翔〜とさ〜と
と〜との遠〜と有とある風光を弄〜と早〜と
必代か〜と四のりも〜とふあ〜とひてをを嫁

舟さたらふりあうれたとい松島象浮の美景も
か〜と〜とも象上の舟は〜と〜と早〜と帰鞍
志〜と〜と

小築記

對山

それ家小あり〜と松さ〜とひ〜と橋をさん
ら〜と〜と〜と何〜と入〜と〜と
心も〜と〜と〜とあ〜とわ〜と
吾も〜と戸乃小庭も〜と太山也の〜と
僅小婦〜と〜とを〜と〜と

垣みちかゝるは風のまじりふとひまのつらき
りふせくもそめてふ三疊のかられ衣をつらて
観修のいとはわるとまじりたるか小義素乃
墨の痕をきよめこのうすり卓ひつるを爐に
かゝるふあゝ是あのれうたふ主とまじり
をかりこゝみゝ白炭のむらむやを志の
まのたよりふとらゝる葉ふめれと風爐
平かてをまじりゝをまじりのらむひひり
あうりのゆゝゝもあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
ふられゝたふゝつふ人あゝあゝあゝあゝあゝ
くゝあうりもたふゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

とる事を學びて共年一主客のまじりまじりを
をかゝるゝまじりもあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
一室あれゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
まじりつちあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
んゝゝあゝあゝ南港小築とりふゝあゝあゝあゝ
まじりゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
鐫おくりたるよりつひそれおあうせてかゝる
るりあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
戯まふ赤電子鴉爪室あゝあゝあゝあゝあゝ
まじりあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

自誠

護物

世よしのと形ふ人も世を棄るをあらふ人も
 平らなるも〜と世法を〜女の心一筋ふかえ
 らん思ひ及ぶを〜何れも成就を傳や者なき
 地平きよき〜その地ふよ〜と〜と〜
 りも傳れ〜その業を〜け〜と〜
 た〜ぬ〜こそ〜むあ〜〜ぬ〜
 ありや〜舟平〜舟有松ふ虫阿〜も虫ハ
 芋ふ生〜菜虫と菜ふ生は菜虫を虚を〜
 と〜ふ〜米を〜と〜る〜よう〜あ〜と〜

たる酒虫を〜、釋〜と〜るもを〜蕨喰ふ
 虫の類を〜母も鱧蝨と〜る虫の類の
 臆小巢と〜むも〜生れ〜古の木の熊山
 うの、鳩鳩の芥の柄も朽あん世を形ひ〜も
 空に登り〜業も〜ふ〜い〜あ〜は〜苦〜
 め〜れて〜あ〜居〜の〜む〜の〜春〜の〜ち〜も〜あ〜
 一〜う〜一〜松の梢ふ〜松の喜秋〜る〜草
 結菴の蛇ふ〜行羽焦〜夏虫も蟻蝶の夕と
 幼〜を〜蟻の〜〜〜培も風ふ被〜月ふ滑〜
 三〜の〜造化ふ〜〜也〜無〜を〜〜
 り〜と〜ん〜と〜欲〜を〜も〜よ〜と〜お〜の〜〜

虫有槃特小忍痴の虫不と佛不慈悲の虫有伯夷
 叔齊ハ忠臣の虫不らつること首陽小処へ玉造の
 小町ハ碧玉の虫不らつこと何葉の危々
 したるもまは後の虫結あせる業あり何葉の危々
 摺小瓶ー依金ハ摺と化し〜のれ
 んおのれをそらぬふあらんぬを〜にほし
 て糸れある〜ある〜ある出よ虫世を秋の蛇
 のあをたの〜も蛇牛の家を融れ俺との
 虫の叢も雨なりてまのむ本陰ハ〜と母自
 家障の子結一節小うけ坊し道を〜す
 後世のみらハ〜

住吉御田記

鶯笠

文政七年甲申臯月二十八日乃あや住吉の神の
 御田の祭をうけつ〜友とらふりささたれと
 みふゆらぬささ〜みやびとさあやさねさ
 くれえいさつ〜君おあ松の〜
 て穢き〜はつけと困とちまはさあなるま
 く〜もつり〜ら〜
 かの宮居あははたなりとら〜

住吉

何うもいふ言をいひふを好めさるるの簀
櫓あづらんよりのもねまさはしうもさるるよ
吾はわくをいひもさるるも破るく思ひ
ささうに捨くたこそあうあも無愁あれ能合
弾ともくさういひ何ものねあまをいひ
しむるや

鶯鳥辞

解雲守

行野を九膏の鵬を名を磐と甲ふ似合て穴
をわる鳥を危きものよもさるる以愛あて

さういふ言をいひふを好めさるるの簀
櫓あづらんよりのもねまさはしうもさるるよ
吾はわくをいひもさるるも破るく思ひ
ささうに捨くたこそあうあも無愁あれ能合
弾ともくさういひ何ものねあまをいひ
しむるや
さういふ言をいひふを好めさるるの簀
櫓あづらんよりのもねまさはしうもさるるよ
吾はわくをいひもさるるも破るく思ひ
ささうに捨くたこそあうあも無愁あれ能合
弾ともくさういひ何ものねあまをいひ
しむるや
さういふ言をいひふを好めさるるの簀
櫓あづらんよりのもねまさはしうもさるるよ
吾はわくをいひもさるるも破るく思ひ
ささうに捨くたこそあうあも無愁あれ能合
弾ともくさういひ何ものねあまをいひ
しむるや
さういふ言をいひふを好めさるるの簀
櫓あづらんよりのもねまさはしうもさるるよ
吾はわくをいひもさるるも破るく思ひ
ささうに捨くたこそあうあも無愁あれ能合
弾ともくさういひ何ものねあまをいひ
しむるや
さういふ言をいひふを好めさるるの簀
櫓あづらんよりのもねまさはしうもさるるよ
吾はわくをいひもさるるも破るく思ひ
ささうに捨くたこそあうあも無愁あれ能合
弾ともくさういひ何ものねあまをいひ
しむるや
さういふ言をいひふを好めさるるの簀
櫓あづらんよりのもねまさはしうもさるるよ
吾はわくをいひもさるるも破るく思ひ
ささうに捨くたこそあうあも無愁あれ能合
弾ともくさういひ何ものねあまをいひ
しむるや
さういふ言をいひふを好めさるるの簀
櫓あづらんよりのもねまさはしうもさるるよ
吾はわくをいひもさるるも破るく思ひ
ささうに捨くたこそあうあも無愁あれ能合
弾ともくさういひ何ものねあまをいひ
しむるや

下

ちぬうれはわーと夕へとあゝ糞土のまうれを啄
牛舌の腐肉を喰むととる黨をあの陣をあー
あゝと市中に眞餅を給ひ又い邑里の家根を
堀り小多の菓をうひあゝ其振舞ひあけとあそ
うー能程権現あゝあゝかゝ林氏の鶴あもうはし
さどかゝあゝかゝ汝の罪をせめ依も彼の存鷄
待もあゝあゝ待も汝を電ああゝあゝ

筆とさうか



